

令和8年度

帰 国 生 入 試

高等学校 入学試験問題

国 語

注 意

- 1 合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- 2 始めの合図があったら、解答用紙の決められた欄に、受験番号、氏名を記入してから始めなさい。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 解答は解答用紙の決められた欄に筆記具ではっきりと書き入れなさい。
- 5 試験時間は50分です。
- 6 計時機能以外の時計の使用は認めません。
- 7 試験中、体の具合や気分が悪くなったときは、静かに手をあげなさい。
- 8 終わりの合図があったら、すぐに筆記具を置きなさい。

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「会話」は知り合い同士、またはたまたま居あわせた者同士の気楽なおしゃべりをさす。しゃれた会話、楽しい会話というように、「会話がスムーズに進む」とは、なめらかで、よ^①どみのない言葉のやりとりをいう。「会話が弾む」とは、ときどきジョークなどもまじえて、とぎれることなく、キャッチボールのように言葉のやりとりがつづくときだ。

それは音楽でいえばハーモニーだ。互いに協力して加速したり、ゆるめたり、盛りあげたりする。それによって関係性が深まり、親密度が増す。そのためにはそれぞれの楽器、A キャラが決まっていたほうがいい。

キャラがはっきりしていれば、期待される役回りもおのずと決まり、コミュニケーションがしやすくなる。リーダーシップをとる役、盛りあげ役、雰囲気づくりの役など、オーケストラのようにそれぞれの楽器の役回りが決まっていれば、ハーモニーは生まれやすい。

そのもつともシンプルな形が、漫才におけるボケとツツコミだ。ボケが世間的な常識から外れたことをいい、ツツコミが常識や論理の側からそのまちがいを指摘する。ボケは放っておくと間延びしてしまう。そこにすかさず相手が突っこむことでリズムや笑いが生まれる。会話が弾むときというのは、知らず知らずのうちにボケとツツコミのような緊張と弛緩^{しかん}のリズムが生まれている。

一方、「議論」は両方ともツツコミ役である。特定のテーマをめぐる、互いの主張をぶつけあい、相手の主張についての疑問点を問いただす。会話とちがって、ただ弾めばいいというものではなく、なんらかの結論^アにトウタツすることが求められる。さらに、相手に自分の正しさを認めさせ、勝ち負けを決することを目的にするのが「討論（ディベート）」である。

たとえば、ツイッターなどSNSの世界はツツコミであふれている。だが、その多くは議論^②になっていない。議論や討論では、自分の主張を裏づける根拠を明示して、話を論理的に展開することが求められる。そのためには、自分が使っている言葉の意味を

明確にするとともに、相手が言葉にこめている意味をも理解する必要がある。B、SNS上ではたんに相手のささいな言葉尻^{じり}をとらえた揚げ足^③とりで終始しがちだ。

ちなみに、SNSではボケとツツコミの関係はあまり見られない。ボケとツツコミは互いに知り合いであったり、同じ場を共有しあった者同士であるからこそ成立する。¹匿名で、互いをよく知らない者同士のやりとりではボケとツツコミのようなかけ合いは生まれにくい。

それでは「対話」とはなにか。会話は知り合い同士や、たまたま居あわせた人のあいだでなされるおしゃべりであると述べた。それに対して、価値観がちがう者同士で交わされるのが対話だ。また、議論や討論とちがうのは、かならずしも結論を出したり、どちらが正しいかをはっきりさせることを目的としない点だ。

会話がどちらかといえば互いの共通点を軸として話が展開していくのに対して、対話は互いのちがう点を軸として話が進む。同じものを見ている、相手には見えていて、自分には見えていないものがある。互いが見ている世界のちがいに注目して、それをいっしょに探究していこうとする姿勢でなされるのが対話だ。

たとえば会話が弾んでいても、どこか違和感をおぼえることがある。キャラに徹して、自分の役回りを演じていれば、会話はスムーズに進み、楽しい雰囲気にはなる。場の雰囲気をこわさないために、愛想笑いをしたり、よけいなことをいわないように口をつぐんだりすることもあるだろう。しかし、一方でなにか自分の中でスルーされているものがあり、その言葉にできない思いが胸の中に^④チンデンしていく。そんな経験はないだろうか。

極端な例だが、たとえば、部屋の中で友人たちと話しているとき、^④部屋の隅に一頭のゾウがいるのを目にしたとしよう。冷静に考えれば、部屋の中にゾウなどいるはずがないことはあなたにもわかっていて、まわりの人たちもなにもいわないので、見えているのは自分だけなのだろうとあなたは思う。

「ゾウがいる！」などと口にしたら、変に思われるだろうから、あなたはゾウなど見えないふりをしておしゃべりをつづける。たいていの会話はそうやってつづく。みなそれぞれに視界の中にゾウやカモシカやイノシシがいるのかもしれない。でも、そのことに気づかぬふりをして、会話をつづけるうちに、自分の中のゾウが見えなくなっていくのだ。

けれども、自分の中のゾウの存在感が大きくなりすぎて、がまんできず「この部屋にゾウがいる」と口にしてしまったとしたら、どうだろう。一瞬、シーンとなるかもしれない。あるいはそのままスルーされてしまうかもしれない。

会話を中断したり、とぎれさせたりすることはハーモニーを崩してしまう。しかし、対話はちがう。対話は、むしろとぎれたり、隙間すきまがあいたりするところからはじまる。

対話的姿勢とは、たとえ相手の言葉が自分の理解を超えていたとしても、それを相手の心の現実として、そのまま受けとめる態度だ。

「えっ、ゾウが見えるんだ！」「どのへんに？」「どのくらいの大きさ？」「どんな様子？」といったように、相手にしか見えていない世界に関心を寄せる。それを自分の常識の物差しで判断したり評価したりせず、まずは相手にとってリアルなものとして受けとめようとする。それが対話的姿勢だ。

世界が多様化し、さまざまな価値観をもった人たちがいる中では、対話的姿勢は重要だ。そのためにまず必要なのは、「ゾウがいる」といっても否定されたり、スルーされたりしない安全な場^⑤である。対話には、なにかの役割を担ったり、キャラを演じたりしなくても、安心してそこにいられるような場が必要なのだ。

弾むような会話は、音楽でいえばハーモニー^⑥にたとえられると述べた。ハーモニーはそれぞれの役割をもった声が重なりあってつづいていく。とぎれなく、隙間なくつづきながら、あるメインとなる旋律を盛りあげていく。いわばシンフォニー（交響曲）のようなイメージだ。

それに対して、対話はしばしばポリフォニー（多声音楽）にたとえられる。ポリフォニーとは、それぞれの声のパートが、独立した旋律をもち、どのパートも対等な重要性をもって重なっていく音楽様式だ。主旋律があるわけではなく、どこに耳を澄ますかによって、音楽はちがって聞こえてくる。

それは、たとえばアフリカのジャングルに暮らすピグミーと呼ばれる人びとの音楽などを聴くとイメージしやすいかもしれない。「密林のポリフォニー」とも呼ばれるピグミーの合唱は、別々のリズムの歌をソツキョウ的に重ねていく独特の音楽だ。

初めてピグミーの合唱を聴いたとき、なんて自由なんだろうと思った。ふつう音楽は洗練されればされるほど、ハーモニーをこわす音やノイズのように聞こえる音が排除されていく。しかし、ピグミーの合唱は、つぶやき、くしゃみ、独り言、背景に聞こえる虫の音までも出入り自由で、互いを許容しあっている。

i 複雑なリズムの重なりはあるのだけれど、それがぴたりと組みあわさるのではなく、無数の隙間がある。

それはピグミーたちの生活の間であるジャングルを満たす動物や鳥や虫の声が重なって聞こえるさまに似ている。

ii 主旋律があるわけではなく、それぞれの生き物が、自分はこのにいるとアピールしている。それぞれの生き物に生きられる場所があり、それぞれの声が響く場所がある。

iii それはまさに対話の空間だ。

対話がよくて、会話や議論がよくないというのではない。会話がふさわしい場もあるし、議論や討論が必要な場もある。でも、人と人の言葉のやりとりが、^⑦会話や議論だけになってしまうと、その中で伝えられない思いが行き場をなくしてしまう。

対話ができる空間とは、自分が感じている違和感を安心して表明できる場のことである。

iv 共通点を確かめることによって安全を得るのではなく、ちがっていても安全であることを確認する場だ。

とはいえ、対話的空間をつくるのは、けっしてかんたんではない。国家間の対立や紛争の^オチョウテイにあたって「対話が重要だ」とよくいわれる。しかし、実際には、互いの利害関係や、「支配／被支配」といった関係性が固定化してしまったうえでの対立を、

対話によって崩すのは容易ではない。互いの関係性が固定化する前の、小さなひっかかりや漠然とした違和感があるという段階でこそ対話は力を発揮する。

人は生きていくうえで対話的空間にずっととどまれるわけではない。不本意なことを受けいれなくてはならないこともある。どっちが正しいか決めなくてはならないこともある。それによって傷つくこともある。

しかし、傷つけないために対話をするのではない。むしろ逆である。互いが安全に傷つくためにこそ対話がある。人は傷つくことなしには生きられない。生きるとは傷を受け、そこから回復することのくりかえしにほかならない。傷がとり返しのつかないほど深くならないようにするためにこそ対話をつづけるのである。

(田中 真知『風を通すレッスン』より)

問 一 二重傍線部ア～オのうち、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問 二 傍線部①「よどみのない」、③「揚げ足とり」の意味として最適なものをそれぞれの語群から選び、記号で答えなさい。

①「よどみのない」

ア 透き通ってくもりがない

イ 悪意がなく誠意が感じられる

ウ なまりがなく標準的な

エ 滞りなくつまる様子がない

③「揚げ足とり」

ア 相手の言い間違いなどをからかうこと

イ 相手のことを言い負かそうとむきになること

ウ 相手の話をはぐらかしてまともにとらないこと

エ 相手の言うことに一つ一つ反応すること

問 三 空欄 A・B に当てはまる語句を次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ ところで ウ あるいは エ さらに オ また カ しかし

問 四 傍線部②「その多くは議論になっていない」とあるが、その理由として最適なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア SNSでは、それぞれの主張を裏付ける根拠を明確にせず、曖昧なまま話が進められるため。

イ SNS上のやり取りでは、互いの言葉が正しい意味を持って主張されておらず、正確性に欠けるため。

ウ SNSは匿名で、互いをよく知らない者同士のやり取りとなり、論理的に話を展開することができないため。

エ SNS上でなされる話のやりとりは、なんらかの結論を出させて勝ち負けを決することを目的としていないため。

問 五 傍線部④「部屋の隅に一頭のゾウがいる」から始まる一連のたとえは、どのような状況を表しているか。その説明として最適なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 実際には存在しないものを感じ取ることによって、心理的な恐怖や不安が生じている状況。

イ 相手の発言が非常に現実的で、共感しやすい内容であるため、その思いが強く表れる状況。

ウ 会話の中で、自分の世界と他人の世界が異なっているのではないかと疑問が浮かんでいる状況。

エ みんなが共通して感じる違和感や問題を、声に出して誰かが指摘することなく、黙っているという状況。

問 六 傍線部⑤「安全な場」とはどのような場所か。「価値観」という言葉を用いて五十文字以内で書きなさい。

問 七 傍線部⑥「音楽でいえばハーモニーにたとえられる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最適なものを次

のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 会話においては、参加者がそれぞれ自分の関心のあることを自由に語り合うため、話題がばらばらになりやすく、結果としてまとまりを欠いたやりとりになってしまうということ。

イ 会話では、主張の対立を恐れずお互いの意見をぶつけ合い、相手を説得したり、自分の意見の正しさを認めさせたりするような、明確な結論を目指したやりとりが求められるということ。

ウ 会話では、発言する人それぞれが独自のリズムや価値観を持ちながらも、互いに干渉し合わずに自由に話すことができ、その多様性がかえって魅力的なやりとりにつながっていくということ。

エ 会話においては、参加者それぞれが場の空気や自分の役割を意識しながら、相手に調子を合わせて発言を重ねていくことで、全体として調和の取れた、なめらかな言葉のやりとりが生まれるということ。

問 八 本文中から次の一文が抜けている。空欄 i ～ iv のどこに入れるのが最適か。記号で答えなさい。

互いに排除もしないし、一体化もしない。

問九 傍線部⑦「会話や議論」とあるが、会話と議論の違いを説明したものとして最適なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 会話は感情や共通理解を重視し、議論は事実や証拠に基づき論理的な意見交換が行われるものである。
- イ 会話はどちらが正しいかを決めることに重点を置いているが、議論は理解を深めることに重点が置かれている。
- ウ 会話は積極的に相手の主張を否定し合い、矛盾点を指摘していくことが多いが、議論はそれを避ける傾向にある。
- エ 会話はリラックスしたおしゃべりを目的とするが、議論は相手の意見に徹底的に反論し、論理的に解決策を探すものである。

問十 筆者は「対話」の必要性をどのように述べているか。解答欄の形式に合うように、七十字以内で書きなさい。

問十一 本文を踏まえて、次のア～オの「話」のうち、「会話」と呼ぶのがふさわしいものはA、「議論や討論」と呼ぶのがふさわしいものはB、「対話」と呼ぶのがふさわしいものはCと答えなさい。

- ア 留学生が、魚を生で食べる習慣が信じられないという話を聞いて、日本との違いを実感した。
- イ 会社で同僚の社員と机の上の整理の仕方についての話をした後、杉男さんのアイデアを採用した。
- ウ 友達と昼休みに、昨日の夕食で食べたものについての話をした後、次の授業の準備に取り掛かった。
- エ 会社で社員たちが、社内で購入するパソコンの機種についての話をして、最新型の機種を購入することに決定した。
- オ 家族でテレビのお天気ニュースを見ながら、明日の天気の話をした後、チャンネルを変えて、バラエティー番組を見た。

□ ② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【これまでのあらすじ】

高校1年生の夏希^{なつき}は、なりゆきで園芸委員会に入る。ある日、学校近くの防波堤で絵を描いていた同じ委員会の1学年上の碧生^{あおい}と出会う。慌てて絵を破る碧生だが、夏希はその絵を忘れられずにいる。中学時代は美術部でコンクール入賞の常連だったが、なぜか高校では絵を描くのをやめてしまった碧生に、夏希は結果が出ずに陸上をやめた自分を重ね、距離を縮めていく。ある日、夏希は碧生がモデルをしていることを知ってしまい、碧生がモデルをやっている理由と自分が絵を描かなくなった理由を聞かされた。その日から一週間経った場面である。

「はあ！……」

雨がやんだばかりの防波堤の先端で、海を見ながら大きなため息をつく。

空は雲に覆われていて、風は生ぬるい。

ここで最後に碧生先輩に会ってから一週間、一度も先輩を見かけていない。

さっきまた、勇気を振り絞って二年生の教室に行ったけど、碧生先輩の姿は見えなかった。そのかわりに教室から出てきた二年二組の担任教師に見つかった。

「お、西倉じゃないか、どうした？」

「せ、先生っ」

碧生先輩の担任は、園芸委員会担当の、あの体育の先生だったのだ。

「い、いえっ、あのっ」

慌てたわたしを見て、先生がにかつと笑った。^①

「碧生なら今日も休みだ」

わたしの顔がかあつと熱くなる。

なんで先生わかったんだろう。ていうか、これじゃわたし、碧生先輩の教室をのぞきにきたストーカーだよ。

「あ、ありがとうございます！ 失礼しますっ！」

それだけ言って、逃げるように校舎から飛び出したんだ。

そしてここにやってきたけど……やっぱり碧生先輩は来ていなかった。

「もしかしてわたし……余計なこと言っちゃったかな」

碧生先輩は親友を亡くして、ずっと悔やんでいるんだ。それなのに部外者のわたしが、エラアそうなことを言ってしまった……。

「うわ！……失敗したかも……」

ひとりで言って、頭を抱える。

それにもしかしたら、碧生先輩がモデルをやっていることに気づいちやったのもまずかったかも。先輩は必死に隠していたんだから、知らないふりしていたほうがよかったのかも。

「はあ……」

やっぱりわたし②って、だめ人間だ。

ひとりぼっちの防波堤で立ちつくす。とても絵を描く気になれなくて、わたしはその場から離れた。

いつもだったら坂道を上って駅に向かうところだけど、なんとなく家にも帰りたくなくて、今日は違う道を歩いてみた。

以前、大きな絵を描いた日に通った、碧生先輩の家へ続く道だ。

港を通り過ぎ、海にそって歩く。梅雨空の雲の間から、薄い光が差してくる。

やがて右側に緩やかな坂道が見えてきた。この坂を上った丘の上に、碧生先輩の家があるのだ。

③でも今日のわたしは、その場で足を止めた。

坂道と反対側を向くと、小さな入り江が見える。海岸は砂浜になっているけれど、海水浴場ではないらしくひと気はない。

そういえば小さいころ、こんな砂浜によく家族で遊びに行ったっけ。靴を脱いで裸足になると、わたしはびよんぴよん跳ねながら、いつも兄に言っただ。

『お兄ちゃん、競争しよう！』

『どうせおれの勝ちだろ？』

『違うもん！ 夏希、負けないもん！』

父の『よい、どん！』と言う声に合わせて、兄とともに走り出す。

足の裏で砂を蹴り、腕を思いっきり振って走る。

ただいつも兄には勝てなくて……そのたびにわたしが大声で泣くから、家族にはあきられていた。

『だから嫌なんだよ、夏希と競争するの』

でもひとしきり泣いたあと、わたしはまた兄に言うんだ。

『お兄ちゃん、もう一度競争しよう！』って。

砂浜を眺めながら、ふっと息を吐く。

「負けず嫌いだったなあ……わたし」

負けるのは悔しかったけど、それでも走るのはやめなかった。

だってわたしは走るのが好きだったから。

胸の奥が懐かしさでいっぱいになり、わたしの足は自然と、砂浜へ続く階段を下りていた。

雲の隙間から、夏の太陽が顔を出す。さあつと金色の光が差し込んで、それをハン^エシヤした海がキラキラと光りはじめる。あたりは静かで、寄せては返す波の音だけが耳に聞こえる。

砂の上にリュックを下ろすと、ローファーと靴下を脱いだ。軽くその場でジャンプしたあと、砂浜の先に視線を向ける。目指すは百メートル先のゴール。

「今度こそ、負けないんだから」

位置についた私の頭に、父の声が響く。

『よい、どん！』

ざっと地面を蹴り、足を前に出す。砂に足を取られ、少しスタートが遅れた。

体勢を立て直し、顔を上げる。手足を思いっきり動かすと、わたしの体が走り出す。

前へ前へ、もっと前へ――。

風に乗って、私は走る。

あれ、なにこれ、^④すっごく気持ちいい！

「はあっ……」

砂浜の端まで走って、わたしは足を止めた。

息が苦しい。だけど……。

「ふふっ……」

つい笑い声が漏れるほど、楽しかったんだ。

兄と走った砂浜。友だちと追いかけてここをして遊んだ公園。クラスみんなと駆けまわった小学校の校庭……。

あのこと、タイムなんか気にせずに、ただ楽しく走っていた。

悔しいこともあったけど、それよりもわたしは走ることが好きだったはず。

それなのにいつからか、人と比べることしかできなくなつて。

私は自分の好きなことを忘れていた。

でも――。

光差す、水平線を見つめる。青い海は、遥か彼方まで続いている。

ここまで逃げてみて、やっとわかったんだ。

わたしは

A

絵を描くことが大好きな、碧生先輩と同じように――。

「夏希！」

突然声が降ってきて、ドキツとする。慌ててあたりを見まわすと、碧生先輩が堤防の上からこちらを見下ろしていた。

「碧生先輩っ！　いつからそこにいたんですか！」

「夏希が走り出す前から」

見られてた？　わたしが走っているところ。

急に照れくささがこみ上げてくる。

「い、いたなら声をかけてくださいよ！　そんなところから眺めてないで」

わたしの声に、碧生先輩がふっと笑う。

「夏希が楽しそうに走ってたから、邪魔しちや悪いと思って」

「え……」

わたし、そんなに楽しそうに見えたのかな？

「それに……やっぱ綺麗きれいだった。夏希の走る姿」

かあつと顔が熱くなり、慌てて碧生先輩から顔をそむける。そんなわたしの耳に、先輩の声が聞こえてきた。

「なあ、夏希、いま時間ある？」

「え？」

「ちよつとおれにつきあつてくれないか？」

「つきあう？　って……どこに？」

思わず顔を上げたら、碧生先輩はわたしを見下ろしながら、優しい顔つきで微笑んでいた。

碧生先輩のあとについて、わたしは歩いた。先輩は駅のほうに向かって、坂道を上っていく。

足元には水たまり。垣根の葉っぱについた水滴が、雨上がりの日差しを浴びて宝石みたいに光っている。

「あの、碧生先輩？　わたしが砂浜にいるって、よくわかりましたね？」

今日の碧生先輩は私服だった。

白いTシャツに黒いパンツ。頭にはキャップをかつこよくかぶっている。仕事帰りなのかもしれない。

「ああ、防波堤に行ってみたけど、おまえいなくて。帰ろうと思って歩いてたら、ひとりで砂浜走ってる変なやつが見えたから」

「へ、変なやつって、失礼な！」

わたしが怒ったら、碧生先輩が口元にこぶしを当てて、くくつと笑った。

あ、笑った。悔しいけど、先輩が笑ってくれるとなんだかホッとする。^⑤

わたしはちよつと足を速めて、先輩の隣に並ぶ。

「今日も……お仕事だったんですか？」

おそろおそろ聞いてみたら、碧生先輩が笑うのをやめて、ぶつきらぼうに答えた。^⑥

「ああ」

やつぱりこの話は、あまりしないほうがいいのかもしれない。

「あのつ、わたし、誰^{だれ}にも言いませんからね！　ちゃんとナイショ^ナにしますから！　ていうか、話す友だちなんていないし」

「夏希、友だちいないんだ」

「碧生先輩に言われたくないです」

クラスでぼっちのくせに。

「おれは友だちなんかいらねーの」

「わたしもです」

碧生先輩が前を向いたまま、また少し笑ったのがわかった。

でももしかして先輩は、過去にあんなことがあったから、友だちなんかいらなんて言っているのかも。

だったらそれは悲しいな……

「だ、だけど、もし碧生先輩がひとりくらい友だち欲しいなって思うなら……わたしがなってあげてもいいですけど？」

わたしが言ったら、碧生先輩がこっちを向いた。一瞬目が合って、慌てて視線をそむける。

「も、もしわたしが友だちになったら……先輩の超広い家に、また遊びにいつてあげてもいいですよ？」

すると次の瞬間、わたしの頭に碧生先輩の手が触れた。ドキッと心臓が跳ねる。するとその手が、わたしの髪をくしゃつとかき回した。

⑦
「ありがとな」

肩をすくめたわたしから、碧生先輩の手が離れていく。そして何事もなかったかのように、また前を向いて歩く。
いまのつて……また猫扱いされたのかな……。

立ち止まりそうになったわたしの目に、碧生先輩の背中が見える。わたしは暴れ出した心臓を必死に落ち着かせながら、置いていかれないよう足を速めた。

（水瀬　さら『君と裸足で駆け抜けろ』より）

問　一　二重傍線部ア～オのうち、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問　二　傍線部①「先生がにかつと笑った」とあるが、その理由として最適なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　下級生の夏希が、二年生の教室をわざわざ訪ねに来る意図を察したから。

イ　いつも一人でいる碧生に、教室まで訪ねてくる後輩がいることを知って安心したから。

ウ　人気者である碧生を訪ねてくる女子の一人に、同じ委員会の夏希がいたのが意外だったから。

エ　夏希が園芸委員会の仕事のためにわざわざ二年生の教室まで来ることに、頼もしさを感じたから。

問 三 傍線部②「わたしって、だめ人間だ」とあるが、そのように感じた理由として適切なものを次のア～カから二つ選び、記

号で答えなさい。

ア モデル雑誌で見かけた碧生先輩のことをしつこく聞きすぎてしまったから。

イ 碧生がモデルをやっていることを知ってしまい、それを碧生に悟られてしまったから。

ウ 親友を亡くした碧生先輩に対して、関係の無い自分が安易に口を出してしまったから。

エ 碧生がモデルをやっているのではないかと陰で調べていたことを知られてしまったから。

オ 親友を亡くした碧生先輩を励ますつもりで、自分のことばかりをいつも話してしまったから。

カ 親友を亡くした碧生先輩のことをあまり考えずに、親友について興味本位で質問してしまったから。

問 四 傍線部③「でも今日のわたしは、その場で足を止めた」とあるが、それはなぜか。その理由として最適なものを次のア～

エから選び、記号で答えなさい。

ア 碧生先輩に余計なことを言ってしまったと気に病んでいて、このまま先輩の家の方に進むのをためらったから。

イ 碧生先輩が家ではなく、入り江で絵を描いている気がして、家に行くことを止めて、入り江に行こうと思ったから。

ウ 碧生先輩の家に行くことへの不安が次第に大きくなり、やはりここで引き返した方が良いのかもしれないと考えたから。

エ その場から見える入り江の様子と夏希自身の記憶が重なり、今に比べてあの頃ころは楽しかったと感傷的な気分になってしまったから。

問 五 傍線部④「すっごく気持ちいい！」とあるが、夏希がそう感じたのはなぜか。三十字以内で答えなさい。

問 六 空欄Aには、夏希の心情を表す言葉が入る。その言葉を前後の文章の流れから自分で考えて書きなさい。

問 七 傍線部⑤「先輩が笑ってくれるとなんだかホッとする」とあるが、この時の夏希の心情として最適なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分がようやく走れるようになったことを碧生が認めてくれたことに誇りを感じている。

イ 碧生と連絡が取れなくなってしまうに困惑していたが、再び自分の前に姿を現したことに照れている。

ウ 碧生が何を考えているかわからなくて不安でいたが、碧生の笑顔を見て穏やかな気持ちになっている。

エ 碧生を怒らしてしまったかと心配していたが、何事もなかったように声をかけてくれたことで拍子抜けしている。

オ 碧生の悲しみや苦しみを感じる一方で、どのように接していいかわからなかった碧生が笑ったことに安心している。

問 八 傍線部⑥「ぶっきらぼうに」の意味として最適なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア とげとげしく イ 無愛想で、そっけなく ウ 冷たく見下して エ 愛らしく、かわいらしく

問 九 傍線部⑦「ありがとな」という碧生の言葉に込められた心情として適切なものを次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分から距離を取ろうとしてもなお関わろうとしてくれる夏希の姿勢に、つい嬉しさを感じている心情。

イ 夏希が自分の思い通り「友達になる」という提案をしてきてくれたことに對して、喜びを感じている心情。
ウ 周囲の人間を遠ざけようとしても会いに来てくれた夏希に對して、驚きと、申し訳なさでいっぱい的心情。
エ 「友達になってもいい」という夏希からの提案に、自分に對してのやさしさを感じ、感謝が込み上げる心情。
オ モデルの仕事を秘密にすると云ってくれた夏希に氣遣いを感じ、それなら今後も友達でいられると安堵あんどしている心情。
カ 碧生に對して慎重に返答することで感情を逆撫さかなでしないように努力する夏希の優しさを感じ、友達になりたいと願う心情。

問 十 本文の表現上の特徴について述べたものとして正しいものを次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 兄との回想場面は、過去の思い出だけでなく、夏希の本当の気持ちを見つめなおすきっかけになっている。

イ 全体を通して会話を多用することで、場面をスムーズに展開させ、夏希と碧生の距離が縮まっていく様子を表現している。

ウ 「かあつと熱くなる」や「ドキツと心臓が跳ねる」など身体的な表現を用いて、夏希の碧生に對する気持ちを表している。

エ 「い、いや」や「だ、だけど」など、夏希の会話で口ごもる表現を多く用いることで、夏希の優柔不断な性格を表している。

オ 「雨がやんだばかり」「雲の隙間から光が差す」「海がキラキラ光る」など、天氣の描写を用いて夏希と碧生の関係の進展を表現している。

カ 「…」や「？」を多用することで、夏希が過去に縛られて前に進めないことをもどかしく思い、碧生に對しても本音を伝えられないことを表している。

国語
解答用紙

一
問一
ア
イ
ウ
エ
オ

問四 問五

[illegible]

問七

問八

問九

[illegible]

二	
問一	問十一
ア	ア
そう	イ
イ	
	ウ
やか	
ウ	エ
エ	オ
オ	

問二

問三

問四

[illegible]

問六

問七

問八

問九

問十

アムアムアム

氏名

得点

一	問一	ア	到達	イ	とくめい	ウ	沈殿	エ	即興	オ	調停
---	----	---	----	---	------	---	----	---	----	---	----

問二

①

エ

③

ア

問三

A

ア

B

カ

問四

ア

問五

ウ

		問六
も	き	自
ら	、	分
え	価	が
る	値	感
場	観	じ
。	が	て
	異	い
	な	る
	つ	違
	て	和
	も	感
	お	を
	互	安
	い	心
	に	し
	受	て
	け	、
	入	表
	れ	明
	て	で

問七	エ
問八	iii
問九	ア

			問十
に	こ	な	生
対	と	い	き
話	を	ほ	る
は	受	ど	上
必	け	深	で
要	入	く	避
で	れ	な	け
あ	合	ら	ら
る	つ	な	れ
	た	い	な
と述べている。	上	よ	い
	で	う	傷
	安	、	が
	全	価	と
	に	値	り
	傷	観	返
	つ	が	し
	く	異	の
	た	な	つ
	め	る	か

問十一

ア

C

イ

B

ウ

A

エ

B

オ

A

二
問一
ア
偉
そう
イ
ゆる
やか
ウ
はだし
エ
反射
オ
内緒

問二	ア
問三	イ
	ウ
問四	ア

心	誰
に	と
走	も
っ	比
て	較
い	せ
た	ず
か	、
ら	タ
。	イ
	ム
	も
	気
	に
	せ
	ず
	に
	た
	だ
	無

問六

やっぱり、走るのが大好き

問七	オ
問八	イ
問九	ア
	エ

問十	ア	ウ
----	---	---

無印
1点

2点

3
点

4点

6点